

CHAPTER 13

次の日、ケイティは「聖マンガ魔法疾患傷害病院」に移され、ケイティが呪いをかけられたというニュースは、すでに学校中に広まっていた。

しかし、ニュースの詳細は混乱していて、ハリー、ロン、ハーマイオニー、そしてリーアン以外は、狙われた標的がケイティ自身ではなかったことを、誰も知らないようだった。「ああ、それにももちろん、マルフォイも知ってるよ」とハリーが言ったが、ロンとハーマイオニーは、ハリーが「マルフォイ死喰い人説」を持ち出すたびに、聞こえないふりをするという新方針に従い続けていた。

ダンブルドアがどこにいるにせよ、月曜の個人教授に間に合うように戻るのだろうか、ハリーは気になった。

しかし、別段の知らせがなかったので、八時にダンブルドアの校長室の前に立ってドアを叩くと、入るように言われた。

ダンブルドアはいつになく疲れた様子で座っていた。

手は相変わらず黒く焼け焦げていたが、ハリーに腰掛けるように促しながら、ダンブルドアは微笑んだ。

「憂いの篩」が再び机に置いてあり、天井に点々と銀色の光を投げかけていた。

「わしの留守中、忙しかったようじゃのう」ダンブルドアが言った。

「ケイティの事件を目撃したのじゃな」

「はい、先生。ケイティの様子は？」

「まだ思わしくない。しかし、比較的幸運じゃった。ネックレスは皮膚のごくわずかな部分をかすただけらしく、手袋に小さな穴が空いておった。首にでもかけておったら、もしくは手袋なしでつかんでいたら、ケイティは死んでおったじゃろう。たぶん即死じゃ。幸いスネイプ先生の処置のおかげで、呪いが急速に広がるのは食い止められたー」

「どうして？」ハリーが即座に聞いた。

「どうしてマダム・ボンフリーじゃないんですか？」

「生意気な！」壁の肖像画の一枚が低い声で言った。

Chapter 13

The Secret Riddle

Katie was removed to St. Mungo's Hospital for Magical Maladies and Injuries the following day, by which time the news that she had been cursed had spread all over the school, though the details were confused and nobody other than Harry, Ron, Hermione, and Leanne seemed to know that Katie herself had not been the intended target.

“Oh, and Malfoy knows, of course,” said Harry to Ron and Hermione, who continued their new policy of feigning deafness whenever Harry mentioned his Malfoy-Is-a-Death-Eater theory.

Harry had wondered whether Dumbledore would return from wherever he had been in time for Monday night's lesson, but having had no word to the contrary, he presented himself outside Dumbledore's office at eight o'clock, knocked, and was told to enter. There sat Dumbledore looking unusually tired; his hand was as black and burned as ever, but he smiled when he gestured to Harry to sit down. The Pensieve was sitting on the desk again, casting silvery specks of light over the ceiling.

“You have had a busy time while I have been away,” Dumbledore said. “I believe you witnessed Katie's accident.”

“Yes, sir. How is she?”

“Still very unwell, although she was relatively lucky. She appears to have brushed the necklace with the smallest possible amount of skin: There was a tiny hole in her glove. Had she put it on, had she even held it in her ungloved hand, she would have died, perhaps

両腕に顔を伏せて眠っているように見えたフィニアス・ナイジエラス・ブラック、シリウスの曽曾祖父が、顔を上げている。

「わしの時代だったら、生徒にホグワーツのやり方に口を挟ませたりしないものを」

「そうじゃな、フィニアス、ありがとう」ダンブルドアが鎮めるように言った。

「スネイプ先生は、マダム・ボンフリーよりずっとよく闇の魔術を心得ておられるのじゃよ、ハリー。いずれにせよ、聖マンガのスタッフが、一時間ごとにわしに報告をよこしておる。ケイティはやがて完全に回復するじゃろうと、わしは希望を持っておる」

「この週末はどこにいらしたのですか、先生？」

図に乗りすぎかもしれないと思う気持は強かったが、ハリーはあえて質問した。

フィニアス・ナイジエラスも明らかにそう思ったらしく、低く舌打ちして非難した。

「いまはむしろ言わずにおこうぞ」ダンブルドアが言った。

「しかしながら、時が来ればきみに話すことになるじゃろう」

「話してくださるんですか？」ハリーが驚いた。

「いかにも、そうなるじゃろう」

そう言うと、ダンブルドアはローブの中から新たな銀色の思い出の瓶を取り出し、杖で軽く叩いてコルク栓を開けた。

「先生」ハリーが遠慮がちに言った。

「ホグズミードでマンダンガスに出会いました」

「おう、そうじゃ。マンダンガスがきみの遺産に、手癖の悪い侮辱を加えておるということは、すでに気づいておる」ダンブルドアがわずかに顔をしかめた。

「あの者は、きみが『三本の箒』の外で声をかけて以来、地下に潜ってしもうた。おそらく、わしと顔を合わせるのを恐れてのことじやろう。しかし、これ以上、シリウスの昔の持ち物を持ち逃げすることはできぬゆえ、安心するがよい」

「あの卑劣な穢れた老いぼれめが、ブラック家伝来の家宝を盗んでいるのか？」

フィニアス・ナイジエラスが激怒して、荒々

instantly. Luckily Professor Snape was able to do enough to prevent a rapid spread of the curse —”

“Why him?” asked Harry quickly. “Why not Madam Pomfrey?”

“Impertinent,” said a soft voice from one of the portraits on the wall, and Phineas Nigellus Black, Sirius’s great-great-grandfather, raised his head from his arms where he had appeared to be sleeping. “I would not have permitted a student to question the way Hogwarts operated in my day.”

“Yes, thank you, Phineas,” said Dumbledore quellingly. “Professor Snape knows much more about the Dark Arts than Madam Pomfrey, Harry. Anyway, the St. Mungo’s staff are sending me hourly reports, and I am hopeful that Katie will make a full recovery in time.”

“Where were you this weekend, sir?” Harry asked, disregarding a strong feeling that he might be pushing his luck, a feeling apparently shared by Phineas Nigellus, who hissed softly.

“I would rather not say just now,” said Dumbledore. “However, I shall tell you in due course.”

“You will?” said Harry, startled.

“Yes, I expect so,” said Dumbledore, withdrawing a fresh bottle of silver memories from inside his robes and uncorking it with a prod of his wand.

“Sir,” said Harry tentatively, “I met Mundungus in Hogsmeade.”

“Ah yes, I am already aware that Mundungus has been treating your inheritance with light-fingered contempt,” said Dumbledore, frowning a little. “He has gone to ground since you accosted him outside the

しく額から出ていった。

グリモールド・プレイス十二番地の自分の肖像画を訪ねていったに違いない。

「先生」しばらくして、ハリーが聞いた。

「ケイティの事件のあとに、僕がドラコ・マルフォイについて言ったことを、マクゴナガル先生からお聞きになりましたか？」

「きみが疑っているということを、先生が話してくださった。いかにも」ダンブルドアが言った。

「それで、校長先生は……？」

「ケイティの事件に関わったと思われる者は誰であれ、取り調べるようわしが適切な措置を取る」ダンブルドアが言った。

「しかし、わしのいまの関心事は、ハリー、我々の授業じゃ」

ハリーは少し恨めしく思った。この授業がそんなに重要なら、第一回目と二回目の間がどうしてこんなに空いたのだろうか？ しかしハリーは、ドラコ・マルフォイのことはもう何も言わず、ダンブルドアを見つめた。

ダンブルドアは新しい思い出を「憂いの篩」に注ぎ込み、今回もまた、すらりとした指の両手に石の水盆を挟んで、渦を巻かせはじめた。

「憶えておるじゃろうが、ヴォルデモート卿の生い立ちの物語は、ハンサムなマグルのトム・リドルが、妻である魔女のメローピーを捨てて、リトル・ハングルトンの屋敷に戻ったところまでで終わっていた。メローピーはひとりロンドンに取り残され、後にヴォルデモート卿となる赤ん坊が生まれるのを待っておった」

「ロンドンにいたことを、どうしてご存知なのですか、先生？」

「カラクタカス・パークという者の証言があるからじゃ」ダンブルドアが答えた。

「奇妙な偶然じゃが、この者が、我々がたたいま話しておった、ネックレスの出所である店の設立に関与しておる」

ダンブルドアが以前にもそうするのを、ハリーは見たことがあったが、ダンブルドアは、砂金取りが篩を濯いで金を見つけるように、「憂いの篩」の中身を揺すった。

渦の中から、銀色の物体が小さな老人の姿に

Three Broomsticks; I rather think he dreads facing me. However, rest assured that he will not be making away with any more of Sirius's old possessions.”

“That mangy old half-blood has been stealing Black heirlooms?” said Phineas Nigellus, incensed; and he stalked out of his frame, undoubtedly to visit his portrait in number twelve, Grimmauld Place.

“Professor,” said Harry, after a short pause, “did Professor McGonagall tell you what I told her after Katie got hurt? About Draco Malfoy?”

“She told me of your suspicions, yes,” said Dumbledore.

“And do you — ?”

“I shall take all appropriate measures to investigate anyone who might have had a hand in Katie's accident,” said Dumbledore. “But what concerns me now, Harry, is our lesson.”

Harry felt slightly resentful at this: If their lessons were so very important, why had there been such a long gap between the first and second? However, he said no more about Draco Malfoy, but watched as Dumbledore poured the fresh memories into the Pensieve and began swirling the stone basin once more between his long-fingered hands.

“You will remember, I am sure, that we left the tale of Lord Voldemort's beginnings at the point where the handsome Muggle, Tom Riddle, had abandoned his witch wife, Merope, and returned to his family home in Little Hangleton. Merope was left alone in London, expecting the baby who would one day become Lord Voldemort.”

“How do you know she was in London, sir?”

なって立ち上がり、石盆の中をゆっくりと回転した。

ゴーストのように銀色だが、よりしっかりした実体があり、ボサボサの髪で両目が完全に覆われていた。

「ええ、おもしろい状況でそれを手に入れましたね。クリスマスの少し前、若い魔女から買ったのですが、ああ、もうずいぶん前のことです。非常に金に困っていると言ってましたが、まあ、それは一目瞭然で。ポロを着て、お腹が相当大きくて……赤ん坊が産まれる様子でね、ええ。スリザリンのロケットだと言っておりましたよ。まあ、その手の話は、わたしども、しょっちゅう聞かされていますからね。『ああ、これはマーリンのだ。これは、そのお気に入りのティーポットだ』とか。しかし、この品を見ると、スリザリンの印がちゃんとある。簡単な呪文を一つ二つかけただけで、真実を知るには十分でしたな。もちろん、そうすると、これは値がつけられないほどです。その女はどのくらい価値のあるものかまったく知らないようでした。十ガリオンで喜びましてね。こんなうまい商売は、またとなかったですな！」

ダンブルドアは、「憂いの篩」をことさら強く一回振った。するとカラクタカス・バークは、出てきたときと同じように、渦巻く記憶の物質の中に沈み込んだ。

「たった十ガリオンしかやらなかった？」ハリーは憤慨した。

「カラクタカス・バークは、気前のよさで有名なわけではない」ダンブルドアが言った。

「そこで、出産を間近にしたメローピーが、たったひとりでロンドンにおり、金に窮する状態だったことがわかるわけじゃ。困窮のあまり、唯一の価値ある持ち物であった、マーヴォロ家の家宝の一つのロケットを、手放さねばならぬほどじゃった」

「でも、魔法を使えたはずだ！」ハリーは急ぎ込んで言った。

「魔法で、自分の食べ物やいろいろな物を、手に入れることができたはずでしょう？」

「ああ」ダンブルドアが言った。

“Because of the evidence of one Caractacus Burke,” said Dumbledore, “who, by an odd coincidence, helped found the very shop whence came the necklace we have just been discussing.”

He swilled the contents of the Pensieve as Harry had seen him swill them before, much as a gold prospector sifts for gold. Up out of the swirling, silvery mass rose a little old man revolving slowly in the Pensieve, silver as a ghost but much more solid, with a thatch of hair that completely covered his eyes.

“Yes, we acquired it in curious circumstances. It was brought in by a young witch just before Christmas, oh, many years ago now. She said she needed the gold badly, well, that much was obvious. Covered in rags and pretty far along ... Going to have a baby, see. She said the locket had been Slytherin’s. Well, we hear that sort of story all the time, ‘Oh, this was Merlin’s, this was, his favorite teapot,’ but when I looked at it, it had his mark all right, and a few simple spells were enough to tell me the truth. Of course, that made it near enough priceless. She didn’t seem to have any idea how much it was worth. Happy to get ten Galleons for it. Best bargain we ever made!”

Dumbledore gave the Pensieve an extra-vigorous shake and Caractacus Burke descended back into the swirling mass of memory from whence he had come.

“He only gave her ten Galleons?” said Harry indignantly.

“Caractacus Burke was not famed for his generosity,” said Dumbledore. “So we know that, near the end of her pregnancy, Merope was alone in London and in desperate need of gold, desperate enough to sell her one and only valuable possession, the locket that was one of

「できたかもしれぬ。しかし、わしの考えでは——これはまた推量じゃが、おそらく当たっているじゃろう……夫に捨てられたとき、メローピーは魔法を使うのをやめてしまったのじゃ。もう魔女でいることを望まなかったのじゃろう。もちろん、報われない恋と、それに伴う絶望とで、魔力が枯れてしまったことも考えられる。ありうることじゃ。いずれにせよ、これからきみが見ることじゃが、メローピーは、自分の命を救うために杖を上げることさえ、拒んだのじゃ」

「子どものために生きようとさえしなかったのですか？」

ダンブルドアは眉を上げた。

「もしや、ヴォルデモート卿を哀れに思うのかね？」

「いいえ」ハリーは急いで答えた。

「でも、メローピーは選ぶことができたのではないですか？ 僕の母と違って——」

「きみの母上も、選ぶことができたのじゃ」ダンブルドアは優しく言った。

「いかにも、メローピー・リドルは、自分を必要とする息子がいるのに、死を選んだ。しかし、ハリー、メローピーをあまり厳しく裁くではない。長い苦しみの果てに、弱りきっていた。そして、元来、きみの母上ほどの勇氣を持ち合わせてはいなかった。ここに立って……」

「どこへ行くのですか？」ダンブルドアが机の前に並んで立つのに合わせて、ハリーが聞いた。

「今回は」ダンブルドアが言った。

「わしの記憶に入るのじゃ。細部にわたって微香であり、しかも正確さにおいて満足できるものであることがわかるはずじゃ。ハリー、先に行くがよい……」

ハリーは「憂いの師」に屈み込んだ。

記憶のひやりとする表面に顔を突っ込み、再び暗闇の中を落ちていった……何秒か経ち、足が固い地面を打った。

目を開けると、ダンブルドアと二人、賑やかな古めかしいロンドンの街角に立っていた。

「わしじゃ」

ダンブルドアは朗らかに先方を指差した。

背の高い姿が、牛乳を運ぶ馬車の前を横切っ

Marvolo's treasured family heirlooms.”

“But she could do magic!” said Harry impatiently. “She could have got food and everything for herself by magic, couldn't she?”

“Ah,” said Dumbledore, “perhaps she could. But it is my belief — I am guessing again, but I am sure I am right — that when her husband abandoned her, Merope stopped using magic. I do not think that she wanted to be a witch any longer. Of course, it is also possible that her unrequited love and the attendant despair sapped her of her powers; that can happen. In any case, as you are about to see, Merope refused to raise her wand even to save her own life.”

“She wouldn't even stay alive for her son?”

Dumbledore raised his eyebrows. “Could you possibly be feeling sorry for Lord Voldemort?”

“No,” said Harry quickly, “but she had a choice, didn't she, not like my mother —”

“Your mother had a choice too,” said Dumbledore gently. “Yes, Merope Riddle chose death in spite of a son who needed her, but do not judge her too harshly, Harry. She was greatly weakened by long suffering and she never had your mother's courage. And now, if you will stand ...”

“Where are we going?” Harry asked, as Dumbledore joined him at the front of the desk.

“This time,” said Dumbledore, “we are going to enter *my* memory. I think you will find it both rich in detail and satisfyingly accurate. After you, Harry ...”

Harry bent over the Pensieve; his face broke the cool surface of the memory and then he was falling through darkness again. ... Seconds

てやって来る。
若いアルバス・ダンブルドアの長い髪と顎額は鳶色だった。
道を横切ってハリーたちの側に来ると、ダンブルドアは悠々と歩道を歩き出した。
濃紫のピロードの、派手なカットの背広を着た姿が、大勢の物珍しげな人の目を集めていた。
「先生、すてきな背広だ」ハリーが思わず口走った。
しかしダンブルドアは、若き日の自分のあとについて歩きながら、クスクス笑っただけだった。
三人は短い距離を歩いた後、鉄の門を通り、殺風景な中庭に入った。
その奥に、高い鉄柵に囲まれたかなり陰気な四角い建物がある。
若きダンブルドアは石段を数段上がり、正面のドアを一回ノックした。
しばらくして、エプロン姿のだらしない身なりの若い女性がドアを開けた。
「こんにちは。ミセス・コールとお約束があります。こちらの院長でいらっしゃいますな？」
「ああ」ダンブルドアの異常な格好をじろじろ観察しながら、当惑顔の女性が言った。
「あ……ちょっくら……ミセス・コール！」
女性が振り向いて大声で呼んだ。
遠くのほうで、何か大声で答える声が聞こえた。
女性はダンブルドアに向き直った。
「入んな。すぐ来るで」
ダンブルドアは白黒タイルが貼ってある玄関ホールに入った。
全体にみすばらしいところだったが、染み一つなく清潔だった。
ハリーと老ダンブルドアは、そのあとからついていった。
背後の玄関ドアがまだ閉まりきらないうちに、痩せた女性が、煩わしいことが多すぎるという表情でせかせかと近づいてきた。
とげとげしい顔つきは、不親切というより心配事の多い顔だった。
ダンブルドアのほうに近づきながら、振り返って、エプロンをかけた別のヘルパーに何か

later, his feet hit firm ground; he opened his eyes and found that he and Dumbledore were standing in a bustling, old-fashioned London street.

“There I am,” said Dumbledore brightly, pointing ahead of them to a tall figure crossing the road in front of a horse-drawn milk cart.

This younger Albus Dumbledore’s long hair and beard were auburn. Having reached their side of the street, he strode off along the pavement, drawing many curious glances due to the flamboyantly cut suit of plum velvet that he was wearing.

“Nice suit, sir,” said Harry, before he could stop himself, but Dumbledore merely chuckled as they followed his younger self a short distance, finally passing through a set of iron gates into a bare courtyard that fronted a rather grim, square building surrounded by high railings. He mounted the few steps leading to the front door and knocked once. After a moment or two, the door was opened by a scruffy girl wearing an apron.

“Good afternoon. I have an appointment with a Mrs. Cole, who, I believe, is the matron here?”

“Oh,” said the bewildered-looking girl, taking in Dumbledore’s eccentric appearance. “Um ... just a mo’ ... MRS. COLE!” she bellowed over her shoulder.

Harry heard a distant voice shouting something in response. The girl turned back to Dumbledore. “Come in, she’s on ’er way.”

Dumbledore stepped into a hallway tiled in black and white; the whole place was shabby but spotlessly clean. Harry and the older Dumbledore followed. Before the front door had closed behind them, a skinny, harassed-looking woman came scurrying toward them.

話している。

「……それから上にいるマーサにヨードチンキを持っていっておあげ。ビリー・スタップズはカサブタをいじってるし、エリック・ホエイリーはシーツが膿だらけで——もう手一杯なのに、こんどは水疱瘡だわ」

女性是谁に言うともなくしゃべりながら、ダンブルドアに目を留めた。

とたんに、たったいまキリンが玄関から入ってきたのを見たかのように、咂然として、女性はその場に釘づけになった。

「こんにちは」

ダンブルドアが手を差し出した。

ミセス・コールはポカンと口を開けただけだった。

「アルバス・ダンブルドアと申します。お手紙で面会をお願いしましたところ、今日ここにお招きをいただきました」

コールは目を瞬いた。

どうやらダンブルドアが幻覚ではないと結論を出したらしく、弱々しい声で言った。

「ああ、そうでした。ええ——ええ、では——わたしの事務室にお越しいただきましょう。そうしましょう」

ミセス・コールはダンブルドアを小さな部屋に案内した。

事務所兼居間のようなところだ。

玄関ホールと同じくみすぼらしく、古ぼけた家具はてんでんバラバラだった。

客にグラグラした椅子に座るよう促し、自分は雑然とした机の向こう側に座って、落ち着いた様子でダンブル

ドアをじろじろ見た。

「ここにお伺いしたのは、お手紙にも書きましたように、トム・リドルについて、将来のことをご相談するためです」ダンブルドアが言った。

「ご家族の方で？」ミセス・コールが聞いた。

「いいえ、私は教師です」ダンブルドアが言った。

「私の学校にトムを入学させるお話で参りました」

「では、どんな学校ですか？」

「ホグワーツという名です」ダンブルドアが

She had a sharp-featured face that appeared more anxious than unkind, and she was talking over her shoulder to another aproned helper as she walked toward Dumbledore.

“... and take the iodine upstairs to Martha, Billy Stubbs has been picking his scabs and Eric Whalley’s oozing all over his sheets — chicken pox on top of everything else,” she said to nobody in particular, and then her eyes fell upon Dumbledore and she stopped dead in her tracks, looking as astonished as if a giraffe had just crossed her threshold.

“Good afternoon,” said Dumbledore, holding out his hand.

Mrs. Cole simply gaped.

“My name is Albus Dumbledore. I sent you a letter requesting an appointment and you very kindly invited me here today.”

Mrs. Cole blinked. Apparently deciding that Dumbledore was not a hallucination, she said feebly, “Oh yes. Well — well then — you’d better come into my room. Yes.”

She led Dumbledore into a small room that seemed part sitting room, part office. It was as shabby as the hallway and the furniture was old and mismatched. She invited Dumbledore to sit on a rickety chair and seated herself behind a cluttered desk, eyeing him nervously.

“I am here, as I told you in my letter, to discuss Tom Riddle and arrangements for his future,” said Dumbledore.

“Are you family?” asked Mrs. Cole.

“No, I am a teacher,” said Dumbledore. “I have come to offer Tom a place at my school.”

“What school’s this, then?”

“It is called Hogwarts,” said Dumbledore.

言った。

「それで、なぜトムにご関心を？」

「トムは、我々が求める能力を備えていると思います」

「奨学金を獲得した、ということですか？ どうしてそんなことが？ あの子は一度も試験を受けたことはありません」

「いや、トムの名前は、生まれたときから我々の学校に入るように記されていてましてね——」

「誰が登録を？ ご両親が？」

ミセス・コールは、都合の悪いことに、間違いなく鋭い女性だった。

ダンブルドアも明らかにそう思ったらしい。というのも、ダンブルドアがピロートの背広のポケットから杖をするりと取り出し、同時にミセス・コールの机から、まっさらな紙を一枚取り上げたのが、ハリーに見えたからだ。

「どうぞ」

ダンブルドアはその紙をミセス・コールに渡しながらかを一回振った。

「これですべてが明らかになると思いますよ」

ミセス・コールの目が一瞬ぼんやりして、それから元に戻り、白紙をしばらくじっと見つめた。

「すべて完璧に整っているようです」

紙を返しながらか、ミセス・コールが落ち着いて言った。

そしてふと、ついさっきまではなかったはずのジンの瓶が一本と、グラスが二個置いてあるのに目を止めた。

「あ——ジンを一杯いかがですか？」 ことさらに上品な声だった。

「いただきます」ダンブルドアがニッコリした。

ジンにかけては、ミセス・コールが初ではないことが、たちまち明らかになった。

二つのグラスにたっぷりとジンを注ぎ、自分の分を一気に飲み干した。

あけすけに唇を舐めながら、ミセス・コールは初めてダンブルドアに笑顔を見せた。

その機会を逃すダンブルドアではなかった。

「トム・リドルの生い立ちについて、何かお

“And how come you’re interested in Tom?”

“We believe he has qualities we are looking for.”

“You mean he’s won a scholarship? How can he have done? He’s never been entered for one.”

“Well, his name has been down for our school since birth ——”

“Who registered him? His parents?”

There was no doubt that Mrs. Cole was an inconveniently sharp woman. Apparently Dumbledore thought so too, for Harry now saw him slip his wand out of the pocket of his velvet suit, at the same time picking up a piece of perfectly blank paper from Mrs. Cole’s desktop.

“Here,” said Dumbledore, waving his wand once as he passed her the piece of paper, “I think this will make everything clear.”

Mrs. Cole’s eyes slid out of focus and back again as she gazed intently at the blank paper for a moment.

“That seems perfectly in order,” she said placidly, handing it back. Then her eyes fell upon a bottle of gin and two glasses that had certainly not been present a few seconds before.

“Er —— may I offer you a glass of gin?” she said in an extra-refined voice.

“Thank you very much,” said Dumbledore, beaming.

It soon became clear that Mrs. Cole was no novice when it came to gin drinking. Pouring both of them a generous measure, she drained her own glass in one gulp. Smacking her lips frankly, she smiled at Dumbledore for the first time, and he didn’t hesitate to press his

話しいただけませんでしょうか？この孤児院で生まれたのだと思いますが？」

「そうですよ」

ミセス・コールは自分のグラスにまたジンを注いだ。

「あのことは、何よりはっきり憶えていますとも。なにしろわたしが、ここで仕事を始めたばかりでしたからね。大晦日の夜、そりゃ、あなた、身を切るような冷たい雪でしたよ。ひどい夜で。その女性は、当時のわたしとあまり変わらない年頃で、玄関の石段をよろめきながら上がってきました。まあ、何も珍しいことじゃありませんけどね。中に入れてやり、一時間後に赤ん坊が産まれました。それで、それから一時間後に、その人は亡くなりました」

ミセス・コールは大仰に領くと、再びたっぷりのジンをぐい飲みした。

「亡くなる前に、その方は何か言いましたか？」ダンブルドアが聞いた。

「たとえば、父親のことを何か？」

「まさにそれなんです。言いましたとも」ジンを片手に、熱心な聞き手を得て、ミセス・コールは、いまやかなり興に乗った様子だった。

「わたしにこう言いましたよ。『この子がパパに似ますように』。正直な話、その願いは正解でしたね。なにせ、その女性は美人とは言えませんがね——それから、その子の名前は、父親のトムと、自分の父親のマールヴォロを取ってつけてくれと言いました——ええ、わかってますとも、おかしい名前ですよ？わたしたちは、その女性がサーカス出身ではないかと思ったくらいでしたよ——それから、その男の子の姓はリドルだと言いました。そして、それ以上は一言も言わずに、まもなく亡くなりました」

「さて、わたしたちは言われたとおりの名前をつけました。あのかわいそうな女性にとっては、それがとても大切なことのように思えたからね。しかし、トムだろうが、マールヴォロだろうが、リドルの一族だろうが、誰もあの子を探しにきませんでしたし、親戚も来やしませんでした。それで、あの子はこの孤児院に残り、それからずっと、ここにいるんで

advantage.

“I was wondering whether you could tell me anything of Tom Riddle’s history? I think he was born here in the orphanage?”

“That’s right,” said Mrs. Cole, helping herself to more gin. “I remember it clear as anything, because I’d just started here myself. New Year’s Eve and bitter cold, snowing, you know. Nasty night. And this girl, not much older than I was myself at the time, came staggering up the front steps. Well, she wasn’t the first. We took her in, and she had the baby within the hour. And she was dead in another hour.”

Mrs. Cole nodded impressively and took another generous gulp of gin.

“Did she say anything before she died?” asked Dumbledore. “Anything about the boy’s father, for instance?”

“Now, as it happens, she did,” said Mrs. Cole, who seemed to be rather enjoying herself now, with the gin in her hand and an eager audience for her story. “I remember she said to me, ‘I hope he looks like his papa,’ and I won’t lie, she was right to hope it, because she was no beauty — and then she told me he was to be named Tom, for his father, and Marvolo, for *her* father — yes, I know, funny name, isn’t it? We wondered whether she came from a circus — and she said the boy’s surname was to be Riddle. And she died soon after that without another word.

“Well, we named him just as she’d said, it seemed so important to the poor girl, but no Tom nor Marvolo nor any kind of Riddle ever came looking for him, nor any family at all, so he stayed in the orphanage and he’s been here ever since.”

Mrs. Cole helped herself, almost

すよ」

ミセス・コールはほとんど無意識に、もう一杯たっぷりとジンを注いだ。

頬骨の高い位置に、ピンクの丸い点が二つ現れた。

それから言葉が続いた。

「おかしい男の子ですよ」

「ええ」ダンブルドアが言った。

「そうではないかと恩いました」

「赤ん坊のときもおかしかったんですよ。そりゃ、あなた、ほとんど泣かないんですから。そして、少し大きくなると、あの子は…変でねえ」

「変というと、どんなふうに？」ダンブルドアが穏やかに聞いた。

「そう、あの子は—」

しかし、ミセス・コールは言葉を切った。ジンのグラスの上から、ダンブルドアを詮索するようにちらりと見た眼差しには、唆味にぼやけたところがまるでなかった。

「あの子は間違いなく、あなたの学校に入学できると、そうおっしゃいました？」

「間違いありません」ダンブルドアが言った。

「わたしが何を言おうと、それは変わりませんね？」

「何をおっしゃろうとも」ダンブルドアが言った。

「あの子を連れていきますね？ どんなことがあっても？」

「どんなことがあろうと」ダンブルドアが重々しく言った。

信用すべきかどうか考えているように、ミセス・コールは目を細めてダンブルドアを見た。

どうやら信用すべきだと判断したらしく、一気にこう言った。

「あの子はほかの子どもたちを怯えさせます」

「いじめっ子だと？」ダンブルドアが聞いた。

「そうに違いないでしょうね」

ミセス・コールはちょっと顔をしかめた。

「しかし、現場をとらえるのが非常に難しい。事件がいろいろあって……気味の悪いこ

absentmindedly, to another healthy measure of gin. Two pink spots had appeared high on her cheekbones. Then she said, “He’s a funny boy.”

“Yes,” said Dumbledore. “I thought he might be.”

“He was a funny baby too. He hardly ever cried, you know. And then, when he got a little older, he was ... odd.”

“Odd in what way?” asked Dumbledore gently.

“Well, he —”

But Mrs. Cole pulled up short, and there was nothing blurry or vague about the inquisitorial glance she shot Dumbledore over her gin glass.

“He’s definitely got a place at your school, you say?”

“Definitely,” said Dumbledore.

“And nothing I say can change that?”

“Nothing,” said Dumbledore.

“You’ll be taking him away, whatever?”

“Whatever,” repeated Dumbledore gravely.

She squinted at him as though deciding whether or not to trust him. Apparently she decided she could, because she said in a sudden rush, “He scares the other children.”

“You mean he is a bully?” asked Dumbledore.

“I think he must be,” said Mrs. Cole, frowning slightly, “but it’s very hard to catch him at it. There have been incidents. ... Nasty things ...”

Dumbledore did not press her, though Harry could tell that he was interested. She took yet

とがいろいろ……」

ダンブルドアは深追いしなかった。

しかしハリーには、ダンブルドアが興味を持っていることがわかった。

ミセス・コールはまたしてもぐいとジンを飲み、バラ色の頬がますます赤くなった。

「ビリー・スタップズの兎……まあ、トムはやっていない、と口ではそう言いましたし、わたしも、あの子がどうやってあんなことができたのかがわかりません。でも、兎が自分で天井の垂木から首を吊りますか？」

「そうは思いませんね。ええ」ダンブルドアが静かに言った。

「でも、あの子がどうやってあそこに上ってそれをやったのが、判じ物でしてね。わたしが知っているのは、その前の日に、あの子とビリーが口論したことだけです。それから……」

ミセス・コールはまたジンをぐいとやった。こんどは顎にちょっぴり垂れこぼした。

「夏の遠足のとき——ええ、一年に一回、子どもたちを連れていくんですよ。田舎とか海辺に——それで、エイミー・ベンソンとデニス・ビショップは、それからずっと、どこかおかしくなりましたね。ところがこの子たちから聞き出せたことといえば、トム・リドルと一緒に洞窟に入ったということだけでした。トムは探検に行っただけだと言い張りましたが、何かでそこで起こったんですよ。間違いありません。それに、まあ、いろいろありました。おかしいことが……」

ミセス・コールはもう一度ダンブルドアを見た。

頬は紅潮していても、その視線はしっかりしていた。

「あの子がいなくなっても、残念がる人は多くないでしょう」

「当然おわかりいただけていると思いますが、トムを永久に学校に置いておくというわけではありませんが？」

ダンブルドアが言った。

「ここに帰ってくるようになります。少なくとも毎年夏休みに」

「ああ、ええ、それだけでも、錆びた火掻き棒で鼻をぶん殴られるよりはまし、というや

another gulp of gin and her rosy cheeks grew rosier still.

“Billy Stubbs’s rabbit ... well, Tom *said* he didn’t do it and I don’t see how he could have done, but even so, it didn’t hang itself from the rafters, did it?”

“I shouldn’t think so, no,” said Dumbledore quietly.

“But I’m jiggered if I know how he got up there to do it. All I know is he and Billy had argued the day before. And then” — Mrs. Cole took another swig of gin, slopping a little over her chin this time — “on the summer outing — we take them out, you know, once a year, to the countryside or to the seaside — well, Amy Benson and Dennis Bishop were never quite right afterwards, and all we ever got out of them was that they’d gone into a cave with Tom Riddle. He swore they’d just gone exploring, but *something* happened in there, I’m sure of it. And, well, there have been a lot of things, funny things. ...”

She looked around at Dumbledore again, and though her cheeks were flushed, her gaze was steady. “I don’t think many people will be sorry to see the back of him.”

“You understand, I’m sure, that we will not be keeping him permanently?” said Dumbledore. “He will have to return here, at the very least, every summer.”

“Oh, well, that’s better than a whack on the nose with a rusty poker,” said Mrs. Cole with a slight hiccup. She got to her feet, and Harry was impressed to see that she was quite steady, even though two-thirds of the gin was now gone. “I suppose you’d like to see him?”

“Very much,” said Dumbledore, rising too.

She led him out of her office and up the

つですよ」
ミセス・コールは小さくしゃっくりしながら言った。
ジンの瓶は三分の二が空になっていたのに、立ち上がったときかなりシャンとしているので、ハリーは感心した。
「あの子にお会いになりたいのではありませんか？」
「ぜひ」ダンブルドアも立ち上がった。
ミセス・コールは事務所を出、右の階段へとダンブルドアを案内し、通りすがりにヘルパーや子どもたちに指示を出したり、叱ったりした。
孤児たちが、みんな同じ灰色のチュニックを着ているのを、ハリーは見た。
まあまあ世話が行き届いているように見えたが、子どもたちが育つ場所としては、ここが暗いところであるのは否定できなかった。
「ここです」
ミセス・コールは、二番目の踊り場を曲がり、長い廊下の最初のドアの前で止まった。ドアを二度ノックして、彼女は部屋に入った。
「トム？ お客様ですよ。こちらはダンパートンさん……失礼、ダンダーボアさん。この方はあなたに——まあ、ご本人からお話ししていただきます」
ハリーと二人のダンブルドアが部屋に入ると、ミセス・コールがその背後でドアを閉めた。
殺風景な小さな部屋で、古い洋筆筒、木製の椅子一脚、鉄製の簡易ベッドしかない。
灰色の毛布の上に、少年が本を手に、両足を伸ばして座っていた。
トム・リドルの顔には、ゴースト一家の片鱗さえない。
メロービーの末期の願いは叶った。
ハンサムな父親のミニチュア版だった。
十一歳にしては背が高く、黒髪で蒼白い。
少年はわずかに目を細めて、ダンブルドアの異常な格好をじっと見つめた。一瞬の沈黙が流れた。
「はじめまして、トム」
ダンブルドアが近づいて、手を差し出した。
少年は蒔踏したが、その手を取って握手し

stone stairs, calling out instructions and admonitions to helpers and children as she passed. The orphans, Harry saw, were all wearing the same kind of grayish tunic. They looked reasonably well-cared for, but there was no denying that this was a grim place in which to grow up.

“Here we are,” said Mrs. Cole, as they turned off the second landing and stopped outside the first door in a long corridor. She knocked twice and entered.

“Tom? You’ve got a visitor. This is Mr. Dumberton — sorry, Dunderbore. He’s come to tell you — well, I’ll let him do it.”

Harry and the two Dumbledores entered the room, and Mrs. Cole closed the door on them. It was a small bare room with nothing in it except an old wardrobe, a wooden chair, and an iron bedstead. A boy was sitting on top of the gray blankets, his legs stretched out in front of him, holding a book.

There was no trace of the Gaunts in Tom Riddle’s face. Merope had got her dying wish: He was his handsome father in miniature, tall for eleven years old, dark-haired, and pale. His eyes narrowed slightly as he took in Dumbledore’s eccentric appearance. There was a moment’s silence.

“How do you do, Tom?” said Dumbledore, walking forward and holding out his hand.

The boy hesitated, then took it, and they shook hands. Dumbledore drew up the hard wooden chair beside Riddle, so that the pair of them looked rather like a hospital patient and visitor.

“I am Professor Dumbledore.”

“ ‘Professor’?” repeated Riddle. He looked wary. “Is that like ‘doctor’? What are you here

た。
ダンブルドアは、固い木の椅子をリドルの傍に引き寄せて座り、二人は病院の患者と見舞い客のような格好になった。
「私はダンブルドア教授だ」
「『教授』？」
リドルが繰り返した。警戒の色が走った。
「『ドクター』と同じようなものですか？ 何しに来たんですか？ あの女が僕を見るように言ったんですか？」
リドルは、いましがたミセス・コールがいなくなったドアを指差していた。
「いや、いや」ダンブルドアが微笑んだ。
「信じてないぞ」リドルが言った。
「あいつは僕を診察させたいんだろう？ 真実を言え！」
最後の言葉に込められた力の強さは、衝撃的でさえあった。
命令だった。
これまで何度もそう言って命令してきたような響きがあった。
リドルは目を見開き、ダンブルドアを睨めつけていた。
ダンブルドアは、ただ心地よく微笑み続けるだけで、何も答えなかった。
数秒後、リドルは睨むのをやめたがへその表情はむしろ、前よりもっと警戒しているように見えた。
「あなたは誰ですか？」
「きみに言ったとおりだよ。私はダンブルドア教授で、ホグワーツという学校に勤めている。私の学校への入学を勧めにきたのだがーきみが来たいのなら、そこがきみの新しい学校になる」
この言葉に対するリドルの反応は、まったく驚くべきものだった。ベッドから飛び降り、憤激した顔でダンブルドアから遠ざかった。
「編されないぞ！ 精神病院だろう。そこから来たんだろう？ 『教授』、ああ、そうだろうさーフン、僕は行かないぞ、わかったか？ あの老いぼれ猫のほうに精神病院に入るべきなんだ。僕はエイミー・ベンソンとかデニス・ビショップなんかのチビたちに何にもしてない。聞いてみるよ。あいつらもそう言うから！」

for? Did *she* get you in to have a look at me?”

He was pointing at the door through which Mrs. Cole had just left.

“No, no,” said Dumbledore, smiling.

“I don’t believe you,” said Riddle. “She wants me looked at, doesn’t she? Tell the truth!”

He spoke the last three words with a ringing force that was almost shocking. It was a command, and it sounded as though he had given it many times before. His eyes had widened and he was glaring at Dumbledore, who made no response except to continue smiling pleasantly. After a few seconds Riddle stopped glaring, though he looked, if anything, warier still.

“Who are you?”

“I have told you. My name is Professor Dumbledore and I work at a school called Hogwarts. I have come to offer you a place at my school — your new school, if you would like to come.”

Riddle’s reaction to this was most surprising. He leapt from the bed and backed away from Dumbledore, looking furious.

“You can’t kid me! The asylum, that’s where you’re from, isn’t it? ‘Professor,’ yes, of course — well, I’m not going, see? That old cat’s the one who should be in the asylum. I never did anything to little Amy Benson or Dennis Bishop, and you can ask them, they’ll tell you!”

“I am not from the asylum,” said Dumbledore patiently. “I am a teacher and, if you will sit down calmly, I shall tell you about Hogwarts. Of course, if you would rather not come to the school, nobody will force you —”

「私は精神病院から来たのではない」ダンブルドアは辛抱強く言った。

「私は先生だよ。おとなしく座ってくれば、ホグワーツのことを話して聞かせよう。もちろん、きみが学校に来たくないというなら、誰も無理強いはいしないー」

「やれるもんならやってみろ」リドルが鼻先で笑った。

「ホグワーツは」ダンブルドアは、リドルの最後の言葉を聞かなかったかのように話を続けた。

「特別な能力を持った者のための学校でー」

「僕は狂っちゃいない！」

「きみが狂っていないことは知っておる。ホグワーツは狂った者の学校ではない。魔法学校なのだ」

沈黙が訪れた。リドルは凍りついていて、無表情だったが、その目はすばやくダンブルドアの両眼を交互にちらちらと見て、どちらかの眼が嘘をついていないかを見極めようとしているかのような様子だった。

「魔法？」リドルが囁くように繰り返した。

「そのとおり」ダンブルドアが言った。

「じゃ……じゃ、僕ができるのは魔法？」

「きみは、どういうことができるのかね？」

「いろんなことさ」

リドルが囁くように言った。

首から瘦せこけた頬へと、たちまち興奮の色が上ってきた。熱があるかのように見えた。

「物を触らずに動かせる。訓練しなくとも、動物に僕の思いどおりのことをさせられる。僕を困らせるやつには嫌なことが起こるようにできる。そうしたければ、傷つけることだってできるんだ」

脚が震えてリドルは前のめりに倒れ、またベッドの上に座った。

頭を垂れ、祈りのときのような姿勢で、リドルは両手を見つめた。

「僕はほかの人とは違うんだって、知っていた」

震える自分の指に向かって、リドルは囁いた。

「僕は特別だって、わかっていた。何かあるって、ずっと知っていたんだ」

“I’d like to see them try,” sneered Riddle.

“Hogwarts,” Dumbledore went on, as though he had not heard Riddle’s last words, “is a school for people with special abilities —”

“I’m not mad!”

“I know that you are not mad. Hogwarts is not a school for mad people. It is a school of magic.”

There was silence. Riddle had frozen, his face expressionless, but his eyes were flickering back and forth between each of Dumbledore’s, as though trying to catch one of them lying.

“Magic?” he repeated in a whisper.

“That’s right,” said Dumbledore.

“It’s … it’s magic, what I can do?”

“What is it that you can do?”

“All sorts,” breathed Riddle. A flush of excitement was rising up his neck into his hollow cheeks; he looked fevered. “I can make things move without touching them. I can make animals do what I want them to do, without training them. I can make bad things happen to people who annoy me. I can make them hurt if I want to.”

His legs were trembling. He stumbled forward and sat down on the bed again, staring at his hands, his head bowed as though in prayer.

“I knew I was different,” he whispered to his own quivering fingers. “I knew I was special. Always, I knew there was something.”

“Well, you were quite right,” said Dumbledore, who was no longer smiling, but watching Riddle intently. “You are a wizard.”

「ああ、きみの言うとおり」
ダンブルドアはもはや微笑んではいなかった。リドルをじっと観察していた。
「きみは魔法使いだ」
リドルは顔を上げた。表情がまるで変わっていた。激しい喜びが現れている。
しかし、なぜかその顔は、よりハンサムに見えるどころか、むしろ端正な顔立ちが粗野に見える、ほとんど獣性をむき出した表情だった。
「あなたも魔法使いなのか？」
「いかにも」
「証明しろ」
即座にリドルが言った。
「真実を言え」と言ったときと同じ命令口調だった。ダンブルドアは眉を上げた。
「きみに異存はないだろうと思うが、もし、ホグワーツへの入学を受け入れるつもりなら——」
「もちろんだ！」
「それなら、私を『教授』または『先生』と呼びなさい」
ほんの一瞬、リドルの表情が硬くなった。
それから、がらりと人が変わったように丁寧な声で言った。
「すみません、先生。あの——教授、どうぞ、僕に見せていただけませんか——？」
ハリーは、ダンブルドアが絶対断るだろうと思った。
ホグワーツで実例を見せる時間が十分ある、いま二人がいる建物はマグルで一杯だから、慎重でなければならないと、リドルにそう言いしかせるだろうと思った。
ところが、驚いたことに、ダンブルドアは背広の内ポケットから杖を取り出し、隅にあるみすばらしい洋筆筒に向けて、気軽にひょいと一振りした。洋筆筒が炎上した。
リドルは飛び上がった。
ハリーは、リドルがショックと怒りで吠え猛るのも無理はないと思った。
リドルの全財産がそこに入っていたに違いない。
しかし、リドルがダンブルドアに食ってかかったときにはもう、炎は消え、洋筆筒はまったく無傷だった。

Riddle lifted his head. His face was transfigured: There was a wild happiness upon it, yet for some reason it did not make him better looking; on the contrary, his finely carved features seemed somehow rougher, his expression almost bestial.

“Are you a wizard too?”

“Yes, I am.”

“Prove it,” said Riddle at once, in the same commanding tone he had used when he had said, “Tell the truth.”

Dumbledore raised his eyebrows. “If, as I take it, you are accepting your place at Hogwarts —”

“Of course I am!”

“Then you will address me as ‘Professor’ or ‘sir.’ ”

Riddle’s expression hardened for the most fleeting moment before he said, in an unrecognizably polite voice, “I’m sorry, sir. I meant — please, Professor, could you show me — ?”

Harry was sure that Dumbledore was going to refuse, that he would tell Riddle there would be plenty of time for practical demonstrations at Hogwarts, that they were currently in a building full of Muggles and must therefore be cautious. To his great surprise, however, Dumbledore drew his wand from an inside pocket of his suit jacket, pointed it at the shabby wardrobe in the corner, and gave the wand a casual flick.

The wardrobe burst into flames.

Riddle jumped to his feet; Harry could hardly blame him for howling in shock and rage; all his worldly possessions must be in there. But even as Riddle rounded on Dumbledore, the flames vanished, leaving the

リドルは、洋筆筒とダンブルドアを交互に見つめ、それから貪欲な表情で杖を指差した。「そういう物はどこで手に入れますか？」

「すべて時が来れば」ダンブルドアが言った。

「何か、きみの洋筆筒から出たがっているようだが」

なるほど、中から微かにカタカタという音が聞こえた。

リドルは初めて怯えた顔をした。

「扉を開けなさい」ダンブルドアが言った。リドルは躊躇したが、部屋の隅まで歩いて行って洋筆筒の扉をパッと開けた。すり切れた洋服の掛かったレールの上にある、いちばん上の棚に、小さなダンボールの箱があり、まるでネズミが数匹揃らわれて中で暴れているかのように、ガタガタ音を立てて揺れていた。

「それを出しなさい」ダンブルドアが言った。

リドルは震えている箱を下ろした。気が挫けた様子だった。

「その中に、きみが持っていてはいけない物が何か入っているかね？」

リドルは、抜け目のない目で、ダンブルドアを長い間じっと見つめた。

「はい、そうだと思います、先生」リドルはやっと、感情のない声で答えた。

「開けなさい」ダンブルドアが言った。リドルは蓋を取り、中身を見もせずベッドの上に空けた。

ハリーはもっとすごい物を期待していたが、あたりまえの小さなガラクタがごちゃごちゃ入っているだけだった。

ヨーヨー、銀の指貫、色の越せたハーモニカなどだ。

箱から出されると、ガラクタは震えるのをやめ、薄い毛布の上でじっとしていた。

「それぞれの持ち主に謝って、返しなさい」ダンブルドアは、杖を上着に戻しながら静かに言った。

「きちんとそうしたかどうか、私にはわかるのだよ。注意しておくが、ホグワーツでは盗みは許されない」

wardrobe completely undamaged.

Riddle stared from the wardrobe to Dumbledore; then, his expression greedy, he pointed at the wand. “Where can I get one of them?”

“All in good time,” said Dumbledore. “I think there is something trying to get out of your wardrobe.”

And sure enough, a faint rattling could be heard from inside it. For the first time, Riddle looked frightened.

“Open the door,” said Dumbledore.

Riddle hesitated, then crossed the room and threw open the wardrobe door. On the topmost shelf, above a rail of threadbare clothes, a small cardboard box was shaking and rattling as though there were several frantic mice trapped inside it.

“Take it out,” said Dumbledore.

Riddle took down the quaking box. He looked unnerved.

“Is there anything in that box that you ought not to have?” asked Dumbledore.

Riddle threw Dumbledore a long, clear, calculating look. “Yes, I suppose so, sir,” he said finally, in an expressionless voice.

“Open it,” said Dumbledore.

Riddle took off the lid and tipped the contents onto his bed without looking at them. Harry, who had expected something much more exciting, saw a mess of small, everyday objects: a yo-yo, a silver thimble, and a tarnished mouth organ among them. Once free of the box, they stopped quivering and lay quite still upon the thin blankets.

“You will return them to their owners with your apologies,” said Dumbledore calmly,

リドルは恥じ入る様子をさらさら見せなかった。

冷たい目で値踏みするようにダンブルドアを見つめ続けていたが、やがて感情のない声で言った。

「はい、先生」

「ホグワーツでは」ダンブルドアは言葉を続けた。

「魔法を使うことを教えるだけでなく、それを制御することも教える。きみは——きつと意図せずしてだと思うが——我々の学校では教えることも許すこともないやり方で、自分の力を使ってきた。魔法力に溺れてしまう者は、きみが初めてでもないし最後でもない。しかし、覚えておきなさい。ホグワーツでは生徒を退学させることができるし、魔法省は——そう、魔法省というものがあるのだ——法を破る者をもっとも厳しく罰する。新たに魔法使いとなる者は、魔法界に入るにあたって、我らの法律に従うことを受け入れねばならない」

「はい、先生」リドルがまた言った。

リドルが何を考えているかを知るのは不可能だった。

盗品の宝物をダンボール箱に戻すリドルの顔は、まったく無表情だった。

しまい終わると、リドルはダンブルドアを見て、素っ気なく言った。

「僕はお金を持っていません」

「それはたやすく解決できる」

ダンブルドアはポケットから革の巾着を取り出した。

「ホグワーツには、教科書や制服を買うのに援助の必要な者のための資金がある。きみは呪文の本などいくつかを、古本で買わなければならないかもしれん。それでも——」

「呪文の本はどこで買いますか？」

ダンブルドアに礼も言わずにずっしりとした巾着を受け取り、分厚いガリオン金貨を調べながら、リドルが口を挟んだ。

「ダイアゴン横丁で」ダンブルドアが言った。

「ここにきみの教科書や教材のリストがある。どこに何があるか探すのを、私が手伝おう——」

putting his wand back into his jacket. “I shall know whether it has been done. And be warned: Thieving is not tolerated at Hogwarts.”

Riddle did not look remotely abashed; he was still staring coldly and appraisingly at Dumbledore. At last he said in a colorless voice, “Yes, sir.”

“At Hogwarts,” Dumbledore went on, “we teach you not only to use magic, but to control it. You have — inadvertently, I am sure — been using your powers in a way that is neither taught nor tolerated at our school. You are not the first, nor will you be the last, to allow your magic to run away with you. But you should know that Hogwarts can expel students, and the Ministry of Magic — yes, there is a Ministry — will punish lawbreakers still more severely. All new wizards must accept that, in entering our world, they abide by our laws.”

“Yes, sir,” said Riddle again.

It was impossible to tell what he was thinking; his face remained quite blank as he put the little cache of stolen objects back into the cardboard box. When he had finished, he turned to Dumbledore and said baldly, “I haven’t got any money.”

“That is easily remedied,” said Dumbledore, drawing a leather money-pouch from his pocket. “There is a fund at Hogwarts for those who require assistance to buy books and robes. You might have to buy some of your spellbooks and so on secondhand, but —”

“Where do you buy spellbooks?” interrupted Riddle, who had taken the heavy money bag without thanking Dumbledore, and was now examining a fat gold Galleon.

“In Diagon Alley,” said Dumbledore. “I have your list of books and school equipment

「一緒に来るんですか？」リドルが顔を上げて聞いた。

「いかにも、きみがもし……」

「あなたは必要ない」リドルが言った。

「自分ひとりでやるのに慣れている。いつでもひとりでロンドンを歩いてるんだ。そのダイアゴン横丁とかいう所にはどうやって行くんだ？——先生？」

ダンブルドアの目を見たたん、リドルは最後の言葉をつけ加えた。

ハリーは、ダンブルドアがリドルに付き添うと主張するだろうと思った。

しかし、ハリーは、また驚かされた。

ダンブルドアは教材リストの入った封筒をリドルに渡し、孤児院から「漏れ鍋」への行き方をはっきり教えた後、こう言った。

「周りのマグル……魔法族ではない者のことだがは見えるはずだ。バーテンのトムを訪ねなさい。その者たちには見えなくとも、きみにきみと同じ名前だから覚えやすいだろう——」

リドルはうるさいハエを追い払うかのように、イライラと顔を引きつらせた。

「『トム』という名前が嫌いなのかね？」

「トムっていう人はたくさんいる」

リドルが呟いた。それから、抑えきれない疑問が思わず口を衝いて出たように、リドルが聞いた。

「僕の父さんは魔法使いだったの？ その人もトム・リドルだったって、みんなが教えてくれた」

「残念ながら、私は知らない」ダンブルドアは穏やかな声で言った。

「母さんは魔法が使えたはずがない。使えたら、死ななかったはずだ」

ダンブルドアにというよりむしろ自分に向かって、リドルが言った。

「父さんのほうに違いない。それで——僕の物を全部揃えたら……その Hogwarts とかに、いつ行くんですか？」

「細かいことは、封筒の中の羊皮枕の二枚目にある」ダンブルドアが言った。

「きみは、九月一日にキングズ・クロス駅から出発する。その中に汽車の切符も入っている」

with me. I can help you find everything ——”

“You’re coming with me?” asked Riddle, looking up.

“Certainly, if you ——”

“I don’t need you,” said Riddle. “I’m used to doing things for myself, I go round London on my own all the time. How do you get to this Diagon Alley —— sir?” he added, catching Dumbledore’s eye.

Harry thought that Dumbledore would insist upon accompanying Riddle, but once again he was surprised. Dumbledore handed Riddle the envelope containing his list of equipment, and after telling Riddle exactly how to get to the Leaky Cauldron from the orphanage, he said, “You will be able to see it, although Muggles around you —— non-magical people, that is —— will not. Ask for Tom the barman —— easy enough to remember, as he shares your name ——”

Riddle gave an irritable twitch, as though trying to displace an irksome fly.

“You dislike the name ‘Tom’?”

“There are a lot of Toms,” muttered Riddle. Then, as though he could not suppress the question, as though it burst from him in spite of himself, he asked, “Was my father a wizard? He was called Tom Riddle too, they’ve told me.”

“I’m afraid I don’t know,” said Dumbledore, his voice gentle.

“My mother can’t have been magic, or she wouldn’t have died,” said Riddle, more to himself than Dumbledore. “It must’ve been him. So —— when I’ve got all my stuff —— when do I come to this Hogwarts?”

“All the details are on the second piece of parchment in your envelope,” said

リドルが頷いた。ダンブルドアは立ち上がって、また手を差し出した。

その手を握りながらリドルが言った。

「僕は蛇と話ができる。遠足で田舎に行ったときにわかったんだ——向こうから僕を見つけて、僕に囁きかけたんだ。魔法使いにとってあたりまえなの？」

いちばん不思議なこの力をこのときまで伏せておき、圧倒してやろうと考えていたことが、ハリーには読めた。

「稀ではある」一瞬迷った後、ダンブルドアが答えた。

「しかし、例がないわけではない」

気軽な口調ではあったが、ダンブルドアの目が興味深そうにリドルの顔を眺め回した。大人と子ども、その二人が、一瞬見つめ合って立っていた。

やがて握手が解かれ、ダンブルドアはドアのそばに立った。

「さようなら、トム。ホグワーツで会おう」

「もうよいじゃろう」

ハリーの脇にいる白髪のダンブルドアが言った。

たちまち二人は、再び無重力の暗闇を昇り、現在の校長室に正確に着地した。

「お座り」ハリーの傍らに着地したダンブルドアが言った。

ハリーは言われるとおりにした。

いま見たばかりのことで、頭が一杯だった。

「あいつは、僕の場合よりずっと早く受け入れた——あの、先生があいつに、君は魔法使いだって知らせた時のことですけれど」ハリーが言った。

「ハグリッドにそう言われたとき、僕は最初信じなかった」

「そうじゃ。リドルは完全に受け入れる準備ができておった。つまり自分が——あの者の言葉を借りるならば——『特別』だということ」

「先生はもうおわかりだったのですか——あのときに？」ハリーが聞いた。

「わしがあのと、開闢以来の危険な闇の魔法使いに出会ったということ、わかっていたかとな？」ダンブルドアが言った。

Dumbledore. “You will leave from King’s Cross Station on the first of September. There is a train ticket in there too.”

Riddle nodded. Dumbledore got to his feet and held out his hand again. Taking it, Riddle said, “I can speak to snakes. I found out when we’ve been to the country on trips — they find me, they whisper to me. Is that normal for a wizard?”

Harry could tell that he had withheld mention of this strangest power until that moment, determined to impress.

“It is unusual,” said Dumbledore, after a moment’s hesitation, “but not unheard of.”

His tone was casual but his eyes moved curiously over Riddle’s face. They stood for a moment, man and boy, staring at each other. Then the handshake was broken; Dumbledore was at the door.

“Good-bye, Tom. I shall see you at Hogwarts.”

“I think that will do,” said the white-haired Dumbledore at Harry’s side, and seconds later, they were soaring weightlessly through darkness once more, before landing squarely in the present-day office.

“Sit down,” said Dumbledore, landing beside Harry.

Harry obeyed, his mind still full of what he had just seen.

“He believed it much quicker than I did — I mean, when you told him he was a wizard,” said Harry. “I didn’t believe Hagrid at first, when he told me.”

“Yes, Riddle was perfectly ready to believe that he was — to use his word — ‘special,’ ” said Dumbledore.

「いや、いま現在あるような者に成長しようとは、思わなんだ。しかし、リドルに非常に興味を持ったことは確かじゃ。わしは、あの者から目を離すまいと意を固めて、ホグワーツに戻った。リドルには身寄りもなく友人もなかったのじゃから、いずれにせよ、そうすべきではあったのじゃが。しかし、本人のためだけではなく、ほかの者のためにそうすべきであるということは、すでにそのときに感じておった」

「あの者の力は、きみも聞いたように、あの年端もゆかぬ魔法使いにしては、驚くほど高度に発達しておった。そして——もっとも興味深いことに、さらに不吉なことに——リドルはすでに、その力を何らかの方法で操ることができることわかっており、意識的にその力を行行使はじめておった。きみも見たように、若い魔法使いにありがちな、行き当たりばったりの試みではなく、あの者はすでに、魔法を使ってほかの者を恐がらせ、罰し、制御していた。首をくくった兎や、洞窟に誘い込まれた少年、少女のちょっとした逸話が、それを如実に示しておる……そうしたければ、傷つけることだってできるんだ……」

「それに、あいつは蛇語使いだった」ハリーが口を挟んだ。

「いかにも。稀有な能力であり、闇の魔術につながるものと考えられている能力じゃ。しかし、知ってのとおり、偉大にして善良な魔法使いの中にも蛇語使いはおる。事実、蛇と話せるというあの者の能力を、わしはそれほど懸念してはおらなかった。むしろ、残酷さ、秘密主義、支配欲という、あの者の明白な本能のほうがずっと心配じゃった」

「またしても知らぬうちに時間が過ぎてしまうた」

窓から見えるまっ暗な空を示しながら、ダンブルドアが言った。

「しかしながら、別れる前に、我々が見た場面のいくつかの特徴について、注意を促しておきたい。将来の授業で話し合う事柄に、大いに関係するからじゃ」

「第一に、ほかにも『トム』という名を持つ者がおると、わしが言ったときの、リドルの反応に気づいたことじやろうな？」ハリーは

“Did you know — then?” asked Harry.

“Did I know that I had just met the most dangerous Dark wizard of all time?” said Dumbledore. “No, I had no idea that he was to grow up to be what he is. However, I was certainly intrigued by him. I returned to Hogwarts intending to keep an eye upon him, something I should have done in any case, given that he was alone and friendless, but which, already, I felt I ought to do for others’ sake as much as his.

“His powers, as you heard, were surprisingly well-developed for such a young wizard and — most interestingly and ominously of all — he had already discovered that he had some measure of control over them, and begun to use them consciously. And as you saw, they were not the random experiments typical of young wizards: He was already using magic against other people, to frighten, to punish, to control. The little stories of the strangled rabbit and the young boy and girl he lured into a cave were most suggestive. ... ‘I can make them hurt if I want to. ...’ ”

“And he was a Parselmouth,” interjected Harry.

“Yes, indeed; a rare ability, and one supposedly connected with the Dark Arts, although as we know, there are Parselmouths among the great and the good too. In fact, his ability to speak to serpents did not make me nearly as uneasy as his obvious instincts for cruelty, secrecy, and domination.

“Time is making fools of us again,” said Dumbledore, indicating the dark sky beyond the windows. “But before we part, I want to draw your attention to certain features of the scene we have just witnessed, for they have a great bearing on the matters we shall be

頷いた。

「自分とほかの者を結びつけるものに対して、リドルは軽蔑を示した。自分を凡庸にするものに対してじゃ。あのときでさえあの者は、違うもの、別なもの、悪名高きものになりたがっていた。あの会話からほんの数年のうちに、知ってのとおり、あの者は自分の名前を棄てて『ヴォルデモート卿』の仮面を創り出し、いまに至るまでの長い年月、その陰に隠れてきた」

「きみは間違いなく気づいたと思うが、トム・リドルはすでに、非常に自己充足的で、秘密主義で、また友人を持っていないことが明らかじゃったの？ ダイアゴン横丁に行くのに、あの者は手助けも付き添いも欲しなかった。自分ひとりでやることを好んだ。成人したヴォルデモートも同じじゃ。死喰い人の多くが、自分はヴォルデモート卿の信用を得ているとか、自分だけが近しいとか、理解しているとまで主張する。その者たちは欺かれておる。ヴォルデモート卿は友人を持ったことがないし、また持ちたいと思ったこともないと、わしはそう思う」

「最後に——ハリー、眠いじゃろうが、このことにはしっかり注意してほしい……若き日のトム・リドルは、戦利品を集めるのが好きじゃった。部屋に隠していた盗品の箱を見たじゃろう。いじめの犠牲者から取り上げた物じゃ。ことさらに不快な魔法を行使した、いわば記念品と言える。このカササギのごとき蒐集傾向を覚えておくがよい。これが、特に後になって重要になるからじゃ」

「さて、こんどこそ就寝の時間じゃ」

ハリーは立ち上がった。

歩きながら、前回、マールヴォロ・ゴーンの指輪が置いてあった小さなテーブルが目にと止まったが、指輪はもうなかった。

「ハリー、何じゃ？」ハリーが立ち止まったので、ダンブルドアが聞いた。

「指輪がなくなっていますが」とハリーは部屋を見回しながら言った。

「今度はさっきのハーモニカとかそんなものが置いてあるんじゃないかと思いました」ダンブルドアは半月メガネの上からのぞきこむようにハリーを見てにっこり笑った。

discussing in future meetings.

“Firstly, I hope you noticed Riddle’s reaction when I mentioned that another shared his first name, ‘Tom’?”

Harry nodded.

“There he showed his contempt for anything that tied him to other people, anything that made him ordinary. Even then, he wished to be different, separate, notorious. He shed his name, as you know, within a few short years of that conversation and created the mask of ‘Lord Voldemort’ behind which he has been hidden for so long.

“I trust that you also noticed that Tom Riddle was already highly self-sufficient, secretive, and, apparently, friendless? He did not want help or companionship on his trip to Diagon Alley. He preferred to operate alone. The adult Voldemort is the same. You will hear many of his Death Eaters claiming that they are in his confidence, that they alone are close to him, even understand him. They are deluded. Lord Voldemort has never had a friend, nor do I believe that he has ever wanted one.

“And lastly — I hope you are not too sleepy to pay attention to this, Harry — the young Tom Riddle liked to collect trophies. You saw the box of stolen articles he had hidden in his room. These were taken from victims of his bullying behavior, souvenirs, if you will, of particularly unpleasant bits of magic. Bear in mind this magpie-like tendency, for this, particularly, will be important later.

“And now, it really is time for bed.”

Harry got to his feet. As he walked across the room, his eyes fell upon the little table on which Marvolo Gaunt’s ring had rested last

「なかなか鋭いのう、ハリー。しかしあのハーモニカはなんでもない、ただのハーモニカだったでな」
この謎のような言葉とともに、ダンブルドアはハリーに手を振った。
ハリーは、もう帰きなさいと言われたのだと理解した。

time, but the ring was no longer there.

“Yes, Harry?” said Dumbledore, for Harry had come to a halt.

“The ring’s gone,” said Harry, looking around. “But I thought you might have the mouth organ or something.”

Dumbledore beamed at him, peering over the top of his half-moon spectacles.

“Very astute, Harry, but the mouth organ was only ever a mouth organ.”

And on that enigmatic note he waved to Harry, who understood himself to be dismissed.